

明治期の軽井沢に対する避暑客の環境認識

Exploring Environmental Perception of Summer Residents in
Karuizawa During the Meiji Period

前田 一馬*

要 旨

本稿の目的は、明治期の軽井沢を避暑地として見いだした欧米人と彼らに次いで軽井沢を訪れた日本人富裕層が、それぞれ同地をどのように認識し意味づけていたのかを明らかにすることである。欧米人の避暑をうながしたのは、彼らの居住する東京周辺の夏季における暑気や湿度にくわえて、伝染病などに対する忌避意識であった。欧米人にとって軽井沢は身体を脅かす疾病から逃れうる安全な場所として認識されていたと考えられる。夏季に長期滞在する機運は、このような環境認識も影響することで醸成されたのである。一方で軽井沢を訪れた日本人富裕層は、当初療養の目的で滞在していた。日本人にとって避暑とは一般的には温泉地に滞在することであった。そのため、温泉入浴を介さない避暑のあり方に疑義を呈しながらも、軽井沢の冷涼で清澄な気候のもとで行なう避暑を経験することによって、次第に新たな避暑を受容したのである。軽井沢は欧米人と日本人にとって健康の回復・維持・増進に好影響を与える場所であり、直接的な場所の経験から社会・文化的に避暑地として構築されたといえよう。

* 立命館大学文学部特任助教

Abstract

This paper aimed to identify how Westerners and wealthy Japanese people (who followed the Westerners) who stayed at Karuizawa as a summer resort in the Meiji period perceived and made sense of this place. Westerners retreated to Karuizawa not only because of the heat and humidity of Tokyo (where they lived), but also to avoid contagious diseases. Karuizawa was considered by Westerners to be a safe place where they could escape from diseases, which encouraged them to stay there for extended periods during the summer months. By contrast, wealthy Japanese people who visited Karuizawa initially stayed for recuperation. For the Japanese, summer retreats generally meant staying at a hot spring resort. Therefore, although they were skeptical about a summer retreat that did not involve bathing in a hot spring, they gradually accepted a new type of summer retreat by experiencing the cool and clear climate of Karuizawa. Karuizawa has had a positive impact on the restoration, maintenance, and promotion of health for Westerners and Japanese people alike, and has been socially and culturally constructed as a summer resort through direct experience of place. When considering environmental perceptions of summer retreats in the Meiji period, this paper argues that it is necessary to note the perceptions of the place associated with health.

キーワード：避暑、欧米人、環境認識、健康と場所、軽井沢、近代日本

Key words : Summer retreat, Westerners, Environmental Perception, Health and Place, Karuizawa, Modern Japan

I. はしがき

近代化期の日本に欧米諸国よりもたらされた知識や思想、技術や商品、そして文化は、日本の社会や文化に大きな影響力を発揮していく。なかでも特定の風景に対する認識は日本の近代化期において大きく変化したもののひとつであろう。これまでに地理学と隣接諸分野では、風景や景観に対する新たな認識や特定の環境における行動様式を明らかにする研究が行われてきた。

たとえば、小口（1985）は明治初期に西洋の医療行為として海水浴が導入されると、海浜という環境は療養の場や娯楽の場へと変容したことを明らかにした。小口の示したように、同一の場所でありながら時間軸を移動することにより、特定の環境認識や風景の見方が変化するという点は、瀬戸内海の風景観の変化や近代的まなざしについて論じた西田（1999）や原（2022）の研究などでも論じられている。他方、夏季のレジャー活動として欧米人によって避暑地にもちこまれたヨットが日本人富裕層に伝播する過程を解明した佐藤（2003）の研究は、避暑地という新しい環境が新たな行動様式を收容する場となったことを示すものである。さらに、荒山（1989）は山頂からの「眺め」という風景の見方が日本山岳会などの組織的な活動を通じて受容されるとともに、登山という行動も喚起されるようになったことを指摘している。また、文化史の福田（1991）は医学的見解の変化によって結核療養地にふさわしいとされる場所が温暖な海浜地域から冷涼な高原へと変遷することを考究した。

このように、日本の近代化期には海水浴・登山・ヨットなどの欧米由来の活動、医学的見解の変化を契機として海浜や山岳、そして高原が「再発見」されたといえる。ある場所に対する意味は本質的に存在しているわけではなく、地理歴史的・社会的コンテクストのなかでつくり出されることをふまえると、これまでにほとんど注目されなかったような風景や環境が意味づけら

れる過程があると考えられる（荒山・大城 1989；シーモア 2005: 227-256）。

上記の事例に連なる近代的な所産のひとつとして、欧米人の影響を受けて日本で展開し、新たな環境認識をつくりだした「避暑」がある（十代田 1995）。戦前期を通じて避暑の目的地である避暑地は各地で成立し、そこに夏季の滞在拠点となる別荘が集積することで別荘地として発展することもあった。避暑地や別荘地は、しばしば都市における日常生活の逃げ場として語られ、豊かな自然環境の享受を可能とする理想的な保養空間と目されたのである（前田 2020）。

明治期の避暑地については、軽井沢の高級イメージの定着過程を分析した内田（1989）や地籍図を用いて最初期の別荘が集積する旧軽井沢の土地所有状況の変化をあとづけた佐藤・斎藤（2004）の論考がある一方で、斎藤（1991, 1994）は軽井沢に先んじて避暑地として発展した箱根と日光を研究している。そこでは、宮ノ下と旧箱根宿に滞在した欧米人の日記などから風景や気候の特徴、避暑の実態が明らかにされ、宮ノ下の富士屋ホテルに残された宿泊台帳の分析から顧客圏の分析も試みられている。日光を事例とした論考では、欧米人による避暑の実態、西洋式ホテルの開業、中禅寺湖畔の避暑倶楽部の活動などが明らかとなった。

従来の研究では欧米人による避暑の実態があとづけられているものの、欧米人にとって避暑地はどのような意味をもち、いかなる環境認識と関係しているのか、あるいはどのように日本人へと受容され、避暑地が目指されるようになったかという点については未解明の部分がある。他方で、興味深いのは、東南アジアの植民地のマラリア患者を療養のために箱根や日光へ転地療養させていたというイギリスの熱帯医学者の報告が、斎藤（1991, 1994）において紹介されていることである。この点に関連して安島・十代田（1991: 44-85）は、箱根で行なわれた脚気療養や鎌倉における結核療養など、西洋医学的な観点から、温泉療法・海水浴療法・気候療法などの効用を説く思潮が避暑地に別荘を構える日本人有閑・富裕層を後押ししたと推察しており、

避暑に対する環境認識を考える際には、健康と結びつけられた場所をめぐる認識のあり方にも留意する必要があるように思われる。

以上をふまえ、本稿では明治期の日本において避暑地を見いだした欧米人と日本人富裕層が、それぞれどのように避暑地を認識し意味づけていたのかを明らかにする¹⁾。研究対象地域は長野県軽井沢とし（図1）、明治期に刊行



図1 1912年の軽井沢周辺

資料：陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井沢」、「御代田」（測図1912年）一部加工。

注：図中「かるゐさは」と表記された軽井沢駅の開業は、1888（明治21）年12月である。1893（明治26）年4月、アプト式レールの採用や26ヶ所のトンネルと18本ものレンガ造りの橋梁の完成により、最大勾配66.7%の碓氷峠に信越線が全通すると、東京周辺からのアクセシビリティは向上し、その後の軽井沢の発展をうながす決定的な要因となっていく。

された英文旅行案内書、気象観測の報告書、新聞や雑誌記事、避暑客の日記・回顧録などを研究資料として用いることで、軽井沢に対する環境認識を浮き彫りにする。さらに日本人富裕層による「避暑」という行為の受容についても検討したい。

近世の軽井沢は、中山道の宿場町として諸大名・幕府役人・旅人の通行による活気のある様相を呈す一方、寒冷なために五穀の生育しない鄙びた寒村として表象されることもあった(秋里 1995[1802]: 462-463)。明治期以降、^{うすい}碓氷新道の開通などにより旧軽井沢宿一帯は衰退しつつあったが、1886(明治 19) イギリス大使館付キリスト教宣教師ショウ(Shaw, A. C.)と大学教師ディクソン(Dixon, J. M.)が来訪して以来、次第に「外国人避暑地」として発展していく。このような変化には、従前に注目されなかった風景や自然環境に対する新たな意味づけがあったと考えられる。このような過程を検討するうえで軽井沢は事例としてふさわしいだろう。

これまでの軽井沢研究は、おもに①避暑地と別荘地の実態や景観の変化(内田ほか 2000; 岡村 2018; 佐藤・斎藤 2004; 梅干野ほか 2010)、②欧米人避暑客の特徴や活動の内実(宮原 1991; 花里 2012)③文学作品やメディアの表象(内田 1989)、④地誌・郷土史(小林 1974; 宍戸 1987)というテーマで蓄積されてきた。それぞれの研究は深淺こそあれ、現在では知りえない貴重な証言や歴史的な出来事に言及しており、軽井沢研究に取り組むうえで重要な知見が提示された。

しかしながら、研究の対象となった歴史的な事象を考察する際、同時代の社会・文化的コンテクストとの関連性があまり意識されてこなかった。このような点に留意しつつ、以下では明治期の軽井沢を避暑地として見いだした欧米人と彼らに次いで軽井沢を訪れた日本人富裕層がそれぞれ同地をどのように認識し意味づけていたのかを明らかにしてみたい。欧米人はどのような背景のなかで軽井沢の環境を評価したのだろうか。たんに母国と類似した風景を感じることで軽井沢を訪れる理由だったのだろうか。日本人富裕層に

よる軽井沢の避暑はたんに欧米人の模倣であっただけなのだろうか。

Ⅱ．軽井沢に対する欧米人のまなざし

1. 英文日本旅行案内書の叙述

まず資料として取り上げたいのは、欧米人が日本各地を旅行する際に頻繁に利用されたと考えられるアーネスト・サトウとホーズ編『*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*』である (Sato and Hawes 1881)。本書は初の本格的な英文日本旅行案内書と位置づけられている (荒山 1991)。第3版 (1891年) からは、編者がチェンバレン (Chamberlain, B. H.) とメイソン (Mason, W. B.) に変わり²⁾、書名も『*A Handbook for Travellers in Japan*』 (以下、『ハンドブック』と略) へと改題された。それ以降、第9版 (1913年) まで改訂されるほど人気を博した。表1は、第2版 (1884年) の軽井沢周辺の記述をまとめたものである。

初版 (1881年) と第2版に記述の差はなくルート番号のみが変更された。軽井沢の記述は、ルート20「東京から中山道」の「碓氷峠から追分：浅間山」に含まれている。ここでは旧中山道で碓氷峠を越えるルートが紹介されており、東京から軽井沢までの所要日数は徒歩や馬車で2日を要した。

さらに記述をみていくと、標高4,050フィート (約1,230m) の碓氷峠の山頂から関東平野のほか、筑波山・榛名山・赤城山を見渡することのできる眺めが賞賛されている。碓氷峠から旧軽井沢まではやや標高が下がるものの依然3,270フィート (約1,000m) もあることから、「平野部の不健康な暑熱を避ける場所として推奨できる」と紹介されている。管見の限り軽井沢を避暑地として紹介した最初の記述と思われる³⁾。当時日本に居住する多くの欧米人は横浜や神戸など港湾部に近い居留地や東京のような都市部に居住していた。「平野部」とは、多くの欧米人の住まう場所であり、夏季の暑気は避けるべき不健康なものと考えられていたことがうかがわれる。

ルート	ポイント	おもな記述
20	坂本から碓氷峠	<p>坂本を出ると碓氷峠の登りがはじまる。</p> <p>軽井沢まで3里あるが、新道が建設されたことにより、馬車で容易にこなせる。</p> <p>頂上へ上昇していくと、壮大な眺めが得られる。すなわち江戸平野、筑波山、榛名、赤城。</p>
	軽井沢	<p>頂上よりわずか780フィート低い軽井沢への降下は誠に簡単であり距離にして大体22町ほどだ。</p> <p>この途中甲州白根山と駒ヶ岳そして八ヶ岳と蓼科山が左手にあらわれ、浅間山がよく見える。</p> <p>軽井沢へは碓氷峠を越える新道が完成した今、江戸からわずか2日の旅となった。全行程を通して馬車などが使えるのだ。海拔3,270フィートという高地に位置しているので夏期は大変涼しく、さらに蚊がいないことも平野部の不健康な暑熱を避ける場所として推薦できるもう一つの理由だ。村には立派な家々が数多くあって良好な宿が得られる。また当地では多様な散策と山登りを楽しむことができる。</p> <p>7月、8月ともなれば未墾の原野には野花が一面を覆いつくし南の方角に向かって何マイルも続く。</p> <p>東は草深い山並みで尽きる。</p> <p>軽井沢から一里の山上に「かまどいわ」と言われている奇妙な石がある。</p> <p>もう一つ注目されるのは愛宕山という孤立した山で、麓から半ばまで登ると小さな御堂と垂直にそびえる岩がある。</p> <p>その近傍に離山という簡単に登ることのできる山があり、その先に浅間山の活火山が位置している。</p>
	旅館	* 三度屋、土屋、亀屋

注：「不快な暑熱」となっている部分は、原文では「unhealthy heat」とあるので、「不健康な暑熱」とした。「まだ鋤の入っていない平野」と訳されている箇所は、原文では「uncultivated moor」となっているので、「未墾の原野」とした。旅館の「＊」は原書では、優れた旅館を示している。

他方で、軽井沢の「未墾の原野」に群生する野花、愛宕山や離山など散策に適した小規模な山などが紹介されていく。後年の改訂版においても気候からみた軽井沢の特色、愛宕山や離山を紹介する構成は変わらない。しかし、軽井沢が避暑地として発展するにしたがって、その描写は版によって変化する。

『ハンドブック』第3版(1891)では、軽井沢へいたる2つのルートが紹介されている(Chamberlain and Mason 1891: 142-144)。ひとつは、1884(明治17)年に開通した碓氷新道を経て「新軽井沢」へ出るルート、もう一方は、旧中山道を通り「旧軽井沢」にいたるルートである(図1)。この版から駅前の「新軽井沢」と旧宿場町周辺の「旧軽井沢」とが区別されている。また第2版との差異は、東京に住まう外国人が不健康な夏の都市から避暑(retreat)に訪れる場所である、と明確に記述されている点である。さらに、日中の気温はあまり上がらないこと、夜間はとくに冷涼なこと、激しい降雨に見舞われるものの日光やその他の山間避暑地(mountain resort)と比較すれば好ましいと感じられることなどが述べられている。また、水はけのよい火山性の土壌は公衆衛生の観点から評価された。他方で、パン・ミルク・肉・魚を入手できるとも記されており、欧米人を対象としたサービスが提供されつつあることもうかがわれる。

『ハンドブック』第4版(1894年)では、軽井沢駅と横川駅とを結ぶアプト式鉄道の技術が紹介されるほかは第3版と内容に差はない(Chamberlain and Mason 1894: 150-153)。つづく第5版(1899年)以降の記述において特筆されるのは、日本だけではなく中国で活動している欧米人宣教師を中心とする避暑地であることが強調されている点である。このことは、軽井沢が1890年代半ばから「宣教師会議の場」として利用されていたことを明らかにした宮原の研究とも合致する(宮原 1991: 122-125)。

つぎに関心を払いたいのは、軽井沢の景観を観察した『ハンドブック』第5版(1899年)の記述である。以下は、軽井沢を避暑地としてふさわしい場

所とする記述の後に挿入された一節の抜粋である。

来訪者はこの場所自体にはさしたる魅力はなく、日本人が大切にしているような温泉や歴史的建造物もないことを理解すべきである。ここは寂れた村で、外国人夏季居住者の安っぽい木造家屋が周囲の平野部に点在している。まるで未開の土地に新しい集落が形成されはじめたかのようだ。しかし、この田舎の周囲では、草で覆われた原野 (grassy moor) や丘陵でも馬を走らせたり、散歩をすることができる。以下で紹介する以外にも、最近外国人によってさまざまな方向にたくさんの小道が整備されており、よい散歩道となっているものの、とくに目的地となるポイントはない (Chamberlain and Mason 1899: 177)

すなわち、軽井沢には温泉や歴史的な社寺や史跡はなく、周囲に広がる原野、丘陵 (愛宕山・離山) は、散策に適する場所であることを認めるものの、結局それだけしか魅力的な要素がないと断言している。そして、「外国人夏季居住者の安っぽい木造りの家屋」、すなわち別荘が次々に建てられていく光景を未開の土地のひろがりのなかに見いだしているものの、寂れた村にすぎないと記す。『ハンドブック』の第5版から第7版 (1903年) まで挿入されたこの指摘は、ある意味で軽井沢の「実態」をあらわしてるといえよう。というのも、後年の軽井沢の案内書などの記述と比べると、軽井沢を過度に称揚していないという意味において冷静な観察といえるからである。さらにいえば、まだこの時期には避暑地としての軽井沢は、一部の欧米人や日本人富裕層にしか共有されていなかったとみることもできよう。

2. カーギル・ノットによる気候観測

先にみたように、『ハンドブック』では軽井沢の冷涼な気候を避暑地の条件としていた。この特徴を気象観測から明確に示そうとしたのが、お雇い外国人のカーギル・ノット (Knott, C. G.) であった。彼は1891年に「Notes on the summer climate of Karuizawa」(Knott 1891: 565-577) と題した論文を日本アジア協会の発行する学術雑誌『*Transaction of the Asiatic Society of Japan*』誌 (『日本アジア協会紀要』) に発表した。ショウは軽井沢を「屋根のない病院」と評したといわれているが (軽井沢町誌刊行委員会 1988: 10)、ここでは新出資料であるノット論文を検討することで、軽井沢の気候はどのような特徴を有し、いかに評価されたのかを明らかにする。ノットの気象観測は科学的な態度で軽井沢を評価しようとした嚆矢であろう。

ノットは、1872 (明治5) 年にエジンバラ大学を卒業すると、同大学自然哲学科助手となった。その後1883年に来日し、日本地震学会を創設したユーイング (Ewin, J. A.) の後任として、東京帝国大学で電気学や磁気学などを教えた。ノットが軽井沢の気象観測を行なった理由は定かではないものの、家族で軽井沢を訪れていたという記録が残されている (宮原 1991: 30-33)。ノットの妻は、ショウとともに軽井沢を訪れたとされるディクソンの妹メアリー・ディクソンであった。このことから、ノットはディクソンとの関係のなかで軽井沢を訪れていたと推察される。

ノット論文では、まず軽井沢の歴史が叙述されるとともに、自然地理的な観察も述べられる。軽井沢は「東京に暮らす外国人のための主要な避暑地 summer resort のひとつとして認識されている」として、「この歴史は1886年、英国国教会大執事のショウとディクソン教授が特徴的な利点を発見したことに始まる」と記している⁴⁾。ついで、江戸時代の軽井沢の歴史が紹介され、自然地理的な叙述へと展開されていく。たとえば、早朝と夕方には霧がよく発生すること、曇りがちな気候は軽井沢と周囲の山地部との地理的・気象学的な関係を反映していることが述べられる。

研究の目的は、1889（明治 22）年の 7 月 15 日から 9 月 2 日における気象観測をもとに、8 月における軽井沢の気候的な特徴を、東京と比較して明らかにすることである。観測用の小屋には水銀温度計・乾湿球温度計・山岳気圧計・集雨漏斗が設置され、1 日 5 回（6 時、10 時、14 時、22 時）の定時観測が実施された。その結果得られた気圧・気温・蒸気圧・湿度・降水量が検討されたのである。結果の要約は以下の通りである。

- ① 軽井沢の 8 月の気温は、東京よりも 4.4°C (8°F) 低い。この違いが軽井沢を快適な避暑地にしている主要な要素である。このことは夜間の気温の低さに大いに関係がある。すなわち、軽井沢の平均日較差は 11.1°C (20.0°F) であるが、東京は 7.7°C (14°F) である。一日の最大気温変動は軽井沢で 18.1°C (32.6°F) に対して、東京では 10.4°C (18.5°F) であった。
- ② 湿度は軽井沢と東京ではほぼ同じである〔平均湿度は軽井沢 86%、東京 83%〕。しかしながら、軽井沢の低い気温によって湿度は倦怠感をもたらす性質を失う。
- ③ 朝と夕方に霧が発生するため、たいへん高湿度のように思われるけれども、村の前に広がる平野の水はけがよい。排水が完全に行なわれれば行なわれるほど、霧状の雲は周囲の山や尾根に限定される。多孔質火山性の土壌は大雨が降ったあとでさえも水の残留を防ぐ。

以上の観測結果をふまえて、ノットは「比較的涼しい夏の気候、気分をすっきりさせる低温の夜、空気を変化させる降雨、南向きの斜面、日本の最もピクチャレスな山岳風景〔浅間山〕によって、軽井沢は避暑地として欠点がほとんどないといえる」（Knott 1891: 574）と結論づけた。さらに、「日光という最も人気のある避暑地においては何ら体系的調査をしていないが、私の訪れた経験の限り、軽井沢は日光に比べてより涼しく、からっとしてい

る」(Knott 1891: 574)と自らの感覚を述べる。さらに、それら双方を訪れた人たちの一般的な見解として、あらゆる点で軽井沢は夏季の居住地(summer residence)にふさわしいと主張した。

当時の日本では主要都市で気象観測が導入されるに過ぎなかったため、地方の避暑地間の気候を比較し得るデータは存在していなかった。ノット論文では、ほかの避暑地との比較は行なわれていないものの、気象観測という科学的な手法で軽井沢の気候的な特徴を示しており、科学的な知見が得られたといえよう。『日本アジア協会紀要』の論文は、英字新聞『*The Japan Weekly Mail*』紙にも全文が転載され、協会の会員だけでなく日本に居留していた外国人たちも目にすることができた。ノット論文は1891年6月13日付の同紙に掲載されており、その知見は共有されていたであろう。

日本の夏季の気候は、欧米人にとってやはり過酷であったようだ。ノットは「湿度が高い日本の気候はおそらく最も不愉快なもの」(Knott 1891: 574)と指摘し、軽井沢以外の避暑地について、「日本の山岳リゾートの涼しい夜は、欧米人にとって過ごしやすい環境である」という見解を示した。つまり、夏季の湿気による不快感を解消するための避暑地がどこなのかを知ることについて、欧米人は高い関心を有していたと考えられる。

Ⅲ. 欧米人の軽井沢観

1. 軽井沢における場所の経験

以上で検討したように、『ハンドブック』の記述でも軽井沢は避暑地として紹介されはじめており、ノットの調査によって、軽井沢の8月の平均気温は東京より4.4℃低いこと、夏季の居住地として最適であることが解明された。それでは実際に軽井沢はどのように経験されていたのであろうか。欧米人の語りに着目し、軽井沢の自然環境や彼らの避暑活動の実態について検討していく。

1883（明治16）年生まれのショウの三男ロナウド（Shaw, R.D.M.）は、軽井沢を訪れた時のことを次のように述懐している。

私を最も感動させたのは、浅間山や八ヶ岳連峰の壮大な眺めをみることのできる〔碓氷峠の〕頂上において、おいしい空気で胸をいっぱい満たしたことである。私の知る限り軽井沢の空気が私を一番元気づけてくれる（Shaw 1976: 70-71）⁵⁾。

彼は父ショウが滞在先として軽井沢を選択した理由について家族の健康を思っただけのことだと推察した⁶⁾。さらに、空気だけでなく、壮大な風景や鳥のさえずり、原野一面に咲くオニユリ、「黄金」のユリ、カンパニュラ、マツムシソウ、ウメバチソウなどの無数の野花、あるいはピクニックや散歩のできる場所の存在を軽井沢の魅力として挙げ、「子供のパラダイスのような軽井沢を去らねばならないときはいつも悲しかった」と振り返る。

ロナウドが日本聖公会の発行する『*Japan Missions*』誌に寄せた文章によると、「軽井沢の爽やかな空気に魅せられた彼〔父ショウ〕は、育ち盛りの幼い子供たちを、毎年夏の東京の蒸し暑さから解放して、軽井沢の新鮮で爽やかな高原の空気を吸わせることができないかと考えていた」（Shaw 1959: 10）と述べており、やはりロナウドにとって「空気」は強い印象を与えたようだ。ロナウドの文章には「冷涼 cool」、「新鮮で爽快な空気 fresh, invigorating air」あるいは「健康的な空気 salubrious air」という表現が頻繁に登場している。このような軽井沢の新鮮で爽快な空気は、ショウの友人をも惹きつけたという。とくにショウの建てた別荘のひとつは、家族とともに東京に住んでいたショウの友人たちによって、たちまち占領させてしまったと振り返っている（Shaw 1959: 11）。

軽井沢の冷涼な気候に対する表現から年少者にも健康的な環境として認識されていることがわかる。家族をもつ欧米人にとっても夏の東京の気候は

避けるべきものであることもうかがわれる。このことに関連して想起されるのは、東南アジアなどの植民地において高い気温、湿度、土地や道路の泥濘などに特色づけられた平野部に対して、気温や湿度が高くなりづらい高地は沼地などから発生する瘴気^{しょうき}が少ないとみられていたことである（エイキン 2014: 29）。このようなミアズマ説的見解は、ヒルステーションを成立せしめる理由のひとつであった。日本に住まう欧米人も夏季において感染症にかかることを懸念しており、居留地の下水道の建設などを要求していたことから（中上 2010）、植民地と同様に夏季の日本の気候も嫌悪の対象となっていた可能性が高い。

軽井沢は日本の街のなかでも最も高い標高に位置し、東南アジアで最も爽快な（invigorating）夏の気候であり、世界中の宣教師による年次会合が開催されることで評判となっています。天の父なる神のおはからいにより、この村は荒廃し取るに足らない状態から、日本や中国、そして台湾の宣教活動において重要な位置を占めるまでに活気づきました。日本に住まう外国人はいつも気候に悩まされており、とりわけコレラやその類いの病気をもたらし夏の気候によって危険にさらされています。毎年この山村の爽やかな雰囲気の中で、疲れ果てて神経をすり減らした多くの労働者は、精神的に元気づけるものを見つけています（Emberson 1904: 270）。

これは、カナダメソジスト教会の宣教師として 1900（明治 33）年に来日し、静岡教会を運営したエンバーソン（Emberson, R.）が 1904 年 8 月 19 日に記した報告の抜粋である。重要なのは、軽井沢が「東南アジアで最も爽快な夏の気候」と位置づけられ、日本の夏季の気候はコレラなどの感染症と結びつけられていることである。つまり軽井沢は身体を脅かす疾病から逃れうる場所として考えられていたと解釈することができる。

また、ロナルドの兄でありショウの次男であるノーマン（Shaw, N.R.）も軽井沢の経験振り返っている。

軽井沢という言葉はなんと素晴らしい思い出を呼びさますことだろうか。なんと幸福な時間を私はあの豊かで香しい花々の絨毯に覆われた平原や山腹、甘い香りのする樅の林、あるいは離山の生い茂る草にたわむれたり、留守にしている巨人の所有物である肘掛椅子〔^{かまどいわ}竈岩〕のそばですごしたことであろう（Shaw 1991: 8-9）⁷⁾。

さらに彼は河川の周辺や「豚の背形をした山」〔hog's back：一ノ字山〕でピクニックやキャンプを経験したことを記している。煌々と火を焚き、結局現れなかった熊や狼を寄せ付けまいと見張りをし、いつ噴火するかも知れない浅間山に畏怖を抱きながら登頂したときの思い出を綴った。

他方、1890（明治23）年に別荘を建てたイギリス大使ヒュー・フレーザー（Fraser, F.）の夫人メアリー（Fraser, M.）は、軽井沢における避暑について次のように書き留めた。

頭上には、カラマツの枝が快い緑のアーチをつくっています。……そして私が音楽がなくて困らないように、野生のつる草や白いアイジサイの生け垣と生い茂るヤマフジとのあいだをくぐって流れる小川が、かたわらで涼しい歌を歌っていますし、空中に飛ぶ幸せな昆虫たちの羽音は、真夏の一すべての鳥がうごかなくなる暑い東洋の真昼の一高い調べを奏でるのです（フレーザー 1988: 203）。

彼女は東京の自宅にいるときには、夏季の気候への嫌悪感を記している。「今の東京はとにかくそこから逃れるべき場所というのが偽らざるところです—たとえ手だてがなければ歩いてでも！暑さは終息を奪い、空気を奪い、

吸い込む風も生きる糧もうばってしまいます」(フレーザー 1988: 93-94)。

以上でみてきた記述は、避暑地として黎明期の軽井沢に滞在した欧米人の主観的なものではある。しかしながら、常住地である平野部の蒸し暑く、忌避されるべき夏季の気候から解放されることは、感染症などの罹患を避けることを可能にする。つまり、軽井沢は欧米人の身体の安心が担保される場所であったといえよう。

2. 軽井沢周辺のおもな行動空間

明治期の後半になると、軽井沢は世間的にも「国際的避暑地」として認知されるようになってきた。夏季の欧米人コミュニティの成熟も進み、1908(明治 41)年には軽井沢体育協会、1916(大正 5)年には軽井沢避暑団が結成された。避暑団は避暑生活に関するルールの策定、スポーツ大会や音楽会の主催、地元行政・住民との交渉役などを担っていた。

避暑団は毎年『*Karuizawa summer Residents' Association Handbook*』という避暑の手引書を会員に配布している。本書は団体の規定、会員名、広告などが掲載されるほか、「散策・小旅行」のようにひろい世代が参加可能と思われる散策の目的地が記されている。少し時代がくだるものの、図 2 はそれらを地図化したものであり、軽井沢における「定番」の行動空間であるといえるだろう。

図 2 をみると、1: 愛宕山、2: 離山、3: 矢ヶ崎山、4: 竈岩など、新／旧軽井沢周辺の場所が目的地となっている。これらの場所は、とりわけ身近な散策地であった。たとえば、離山は「テーブルマウンテン」、矢ヶ崎山は「プロスペクトポイント」(絶景峰)、竈岩と称された大岩は「ジャイアントチェア」(巨人の椅子)、さらに 10: 一ノ字山は「ホッグスバック」(豚の背)とといったように英語の愛称が付与されていることから、これらの場所が欧米人によく親しまれていたと推察される。

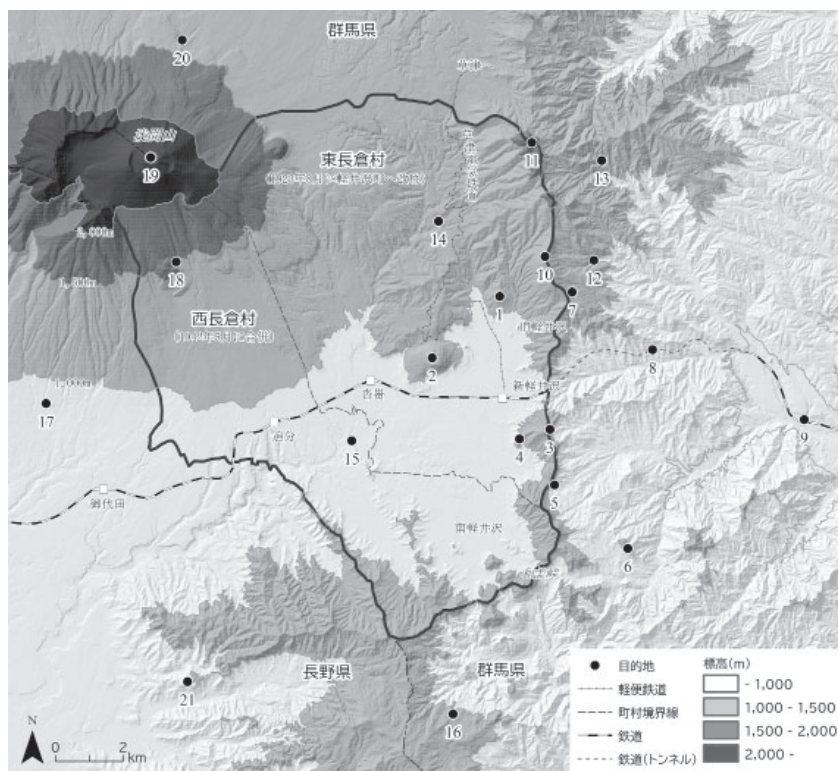


図2 軽井沢周辺における欧米人の散策・小旅行の行先

資料：Karuizawa summer Residents' Association (1920). *Karuizawa summer Residents' Association Handbook 1920*. KYO-BUN-KWAN

注：基図と標高は、ESRI ジャパン「ArcGISGeoSuite 地形」を使用した。また、道路・鉄道・行政界などは、陸軍参謀本部陸地測量部五万分の一地形図「軽井沢」、「御代田」（測図 1912 年）を参照した。草津軽便鉄道は、1924 年に社名を草津電気鉄道へ変更した。

1：愛宕山、2：離山、3：矢ヶ崎山、4：竈岩、5：入山峠、6：和美峠（ローソク岩）、8：熊ノ平、9：横川、10：一ノ字山、11：留布山・鼻曲山、12：雄滝／雌滝、13：霧積、14：小瀬、15：釜ノ橋、16：神津牧場、17：真楽寺、18：血ノ池、19：浅間山、20：鬼押出し、21：関伽流山

また、17：真楽寺や21：^{あかるさん}関伽流山など、長時間の移動を要する場所も挙げられている。このように、散策や小旅行に選ばれた場所を地図化すること

で、当時軽井沢を訪れた欧米人の行動空間を明らかにすることができた。彼らの好んだ散策先に共通する特徴は、標高が周囲よりも高いことであり、遠方まで見渡せる眺望のよい場所、あるいは山間の滝や河川などの自然美のあふれる景色であった（図3・図4）。



図3 「1：愛宕山」よりみた風景（筆者所蔵）
 軽井沢駅や矢ヶ崎山の方を望む（大正中期 - 昭和初期）



図4 「3：矢ヶ崎山」よりみた風景（筆者所蔵）
 手前には離山、奥には浅間山がみえる（大正中期 - 昭和初期）

ショウとディクソンが軽井沢を訪れた 1886 年から約 20 年後に刊行された『ハンドブック』第 8 版(1907 年)の巻頭では、軽井沢が日本の避暑地の代表例として取り上げられるにいたった(Chamberlain and Mason 1907)。軽井沢がどのように欧米人たちの間で認識されていたのかを、慶應義塾大学や立教大学などで英語教師をつめとめた宣教師ロイド(Lloyd, A.)は、25 年に及ぶ日本滞在生活を著した作品で以下のように記している。

……夏が近づくにつれて、東京に住む疲れ切った外国人は、自分たちが非常に過酷な生活を送っていると考え、猛暑の季節をどこで過ごすか思案し始める。箱根や日光はもちろんのこと、大磯や茅ヶ崎、そして鎌倉といった日本人たちにも人気の海浜リゾート(seaside resorts)を思い浮かべるかもしれない。しかし、まとまった休暇を取る余裕があり、妻や家族のことを考えている人はほとんどの場合、元気を取り戻すのに最適な場所(the proper place for recuperation)として軽井沢を選び、友人たちに小さな家を借りられないかと相談するだろう。もしここが気に入れば、多くの人がやっているように、山のごく一部を買い求め、サマーキャンプをするに十分な簡素な小屋を建てるだろう。このようにして、極東で最も人気のある避暑地(summer resort)軽井沢の居住者となるのだ(Lloyd 1909: 205)。

ロイドによれば、猛暑から逃れるための場所として欧米人が想起するのは、箱根や日光などの山間や、湘南一帯の海辺の避暑地である一方で、家族のいる場合は軽井沢が選ばれると記している。他の避暑地と異なり、軽井沢が人気であったのは、「元気を取り戻す recuperation」ことができる場所であること、そして小さいながらも容易に「家」が手に入ることが挙げられている。

前者については、これまで述べてきたように、夏季の暑熱や感染症の不安

を払拭するような山の冷涼な空気、ピクチャレスクな風景などの自然環境を指していると考えられる。それだけではなく、スポーツ・音楽、あるいは散策を中心とした活動を可能にする社会環境が醸成されていたことも重要であろう。後者の「小さな家」とは、間違いなく「別荘」のことを示しており、滞在場所としての別荘が重要な役割を果たしていたことがうかがわれる。別荘の建設を可能にした立地条件は、軽井沢の周辺の土地に余剰があったこと、地元住民が経済的に困窮していたことなどが挙げられる。つるや旅館主人の佐藤不二男によれば、「土地が非常に安かった、金をつけても土地を人にやりたい位」⁸⁾で、「明治三十年頃は坪十錢位、高いものでも二十五錢位でした」⁹⁾と当時の状況を振り返っている。ショウの購入した土地は一坪当たり4錢という金額であった¹⁰⁾。つまり、土地の価格が安価であったことも別荘の建設を後押ししたのである。

ロイドの語りをみると、『ハンドブック』第5版(1899年)では、見るべきものは何もないと評された場所とは思えないほどに、軽井沢の評判は高くなっていることがわかる。こうした変化は、軽井沢を訪れて滞在する欧米人が増加し、場所の経験が蓄積されていったからにほかならない。夏季の都市の蒸し暑さや不衛生な環境を忘れさせる冷涼な気候と爽快感を感じさせるピクチャレスクな自然景観に富む軽井沢の魅力は、散策先の山や岩に愛称を付与することに結びついたように、彼らのメンタルマップのなかに刻み込まれた。そのような過程を垣間見せるのが、経験を反映した「語り」なのであり、それぞれのポジティブな経験が欧米人の中で共有化されることで、軽井沢は「避暑地」として構築されたと解釈することができる。

IV. 日本人富裕層の滞在と避暑の受容

日本人による避暑は、常住地とは異なる環境で夏季を過ごした欧米人の模倣と説明されてきた(安島・十代田 1991: 47)。欧米人の行動の影響を受け

たことは明らかであるが、たんに模倣だけではない側面があると考えられる。ここでは軽井沢を日本人の語りに注目して、彼らの抱いた軽井沢観を検討していきたい。

日本人といっても、当時別荘を所有したのは貴族・政治家・軍人・学者・医者などの富裕層であった。軽井沢に別荘をはじめて建てた日本人は、八田裕二郎（海軍大佐）といわれており、それは1893（明治26）年のことであった。その後、末松謙澄（政治家）・三井三郎助（実業家）・佐々木政吉（元東京帝国大学医学部教授、杏雲堂院長）・青山胤通（東京帝国大学医学部教授）などが続いた。

八田裕二郎が軽井沢を訪れるようになった経緯は、宮原安春が八田の息子・八田裕一に対する聞き取り調査から明らかにしている（宮原1991: 18-24）。それによれば、八田は1860年代後半から1880年頃まで、延べ10年間ほどイギリスの海軍学校へ留学しており、帰国後はとくに体調を崩していた。療養のため群馬県の霧積温泉に滞在していた八田は、夕食で牛肉が提供されたことに驚き、旅館の主人に入手先を問うと、欧米人避暑地の軽井沢で手に入れたと教えられた。さっそく軽井沢へ赴いたところ、ここに滞在すると病気が治りやすいことを欧米人に助言され、このことが別荘を建てる契機となった。

八田は、雑誌『住宅』（1917年）に「草分けの別荘持として」と題する文章を寄稿している¹¹⁾。これによれば、「自分は壮年の頃から酷暑になると健康を害する憂があるので毎年避暑地の選択に苦しんだ」と述懐し、軽井沢に来る前年には元箱根、その前年は日光の中禅寺湖に避暑していたが、「交通風俗気候等の点について面白くな」かったと述べる。それに対して、軽井沢は「真に満目荒涼たるものであつたが温度や気圧を計つて見ると日光箱根より遙かに清涼で土地も高く交通の便もよかつた」（八田2017a: 350）、と述べ、「脳病神経衰弱保養の為め最も適したる」（八田2017b: 356）と、身体の療養という観点から軽井沢を高く評している。いつ軽井沢を訪れたのかは定

かではないが、「温度や気圧を計つて見る」という記述があることから、1889年のノットの気候調査後の可能性がある。

政治家の尾崎行雄も療養や保養から軽井沢を紹介している。「私は生来頭脳が弱くして少し使いすぎるとすぐ頭痛がして眠られなくなつたりしたが廿四五年以前に激烈なる神経衰弱に罹つた〔。〕それには高山療法より善いものはないと教へられ毎年夏季は箱根山脈の各地日光の奥地中禅寺軽井沢など東京より程遠からぬ高地に療養を試みた」(尾崎 1925: 1)と語っている。後年の語りでは、ショウが「日本中にこんな空気のいゝ所はない」と話していたことを紹介し、「吾々は一寸通つた位では空気の善し悪しは判らぬが、西洋人は余程敏感に感じるものとみえる」とも述べている(尾崎 1936: 270)。この点から、少なくとも尾崎自身は、欧米人の軽井沢観を通して、軽井沢の「空気」の効能に気づかされたといえよう。

八田や尾崎の他にも 1900 年前後には、日本人医師が立て続けに別荘をもつようになっている。その一人は佐々木政吉である。「……私は元来汗かきでした、夏の暑さに東京などに居やうものなら身体中へアセモが出来て苦しむのみか其結果夜分眠られなくて困りました」と軽井沢に別荘を構えるにいたった動機を話す¹²⁾。佐々木は、他の避暑地と比較したうえで、汗をかかず、よく眠ることができ、清潔な飲料水のある軽井沢を見いだしたという。また、6 時間程度で東京と行き来できる交通の利便性を挙げている。つまり、東京で結核を専門とする杏雲堂^{きょううんどう}で診療にあたっていた彼の場合、療養というよりは、あくまでも夏季を快適に過ごす場所として軽井沢を位置づけている。

青山胤通の伝記によれば、近親者が軽井沢の自然を推奨したことで、別荘を所有することになった(鶴崎 1930: 231)。政治家の原嘉道は「先生は余程前から避暑には毎に山へ行かれたが、当時は避暑と云へば海辺に行くのが普通」だったと述べ、青山から「避暑に海に行く者の気が知れぬ」といわれたという(原 1930: 325)。明治期の風潮として海浜でもなく、ましてや温泉の

ない山間部に避暑することは、あまり一般的ではなかった。医師が軽井沢に着目していることは、専門知識をもつ人すらも惹きつけるような医学的な側面から評価できる要因があったのかもしれない。

療養地としての軽井沢が語られる際にしばしば言及される人物として、陸軍軍医で日本赤十字病院長を務めた橋本綱常を挙げることができる。ドイツで学位を取得した橋本は、陸軍だけでなく明治期の医学界においても指導的な立場にあった。日本鉄道社長を歴任した毛利重輔を父にもつ足立（毛利）鐵之助（成城学校教師）は、ショウと橋本が「夏期の健康地として推賞せし^マが因をなし」、軽井沢が避暑地として発展したことを指摘する（足立 1930: 12）。彼自身、鉄道技術者であった父の影響と、橋本に勧められたことで日清戦争の直前に、はじめて軽井沢を訪れたと記している。

また、新渡戸稲造（元札幌農学校助教授・台湾総督府技師）も、当初は軽井沢を避暑地と考えていなかった一人である。軽井沢が涼しい場所であることは知っていたものの、温泉のないことから伊香保温泉を避暑地にしていたという。ところが、東京外国語学校時代の恩師ホワイト（White, W.）¹³⁾の別荘を訪ねるため、伊香保から軽井沢入りしたときのことを以下のように回顧している。「……伊香保では毎日温泉につかりながら汗を流したものが軽井沢に来て見^{みる}と空気がいかにもすが^へしくて少しも汗をかかないので軽井沢といふ所はこんなに清冽な所かと驚いた次第であつた」（新渡戸 1917: 349）。新渡戸もまた、避暑を温泉と結びつけていたことがわかる。しかし、冷涼な気候の軽井沢に来てみると、温泉がなくとも避暑が可能であることに気づいたのがある。新渡戸は、1901（明治 34）年に死去したホワイトの別荘を買い取り、1909 年には神経衰弱による体調不良で療養していたのであった（一記者 1909: 1369）。

以上でみた語りから、軽井沢の気候は、頭痛や神経衰弱の療養、身体の保養と結びつけられていた。さらに、温泉地に滞在し入浴することが日本人の避暑の典型であったのに対して¹⁴⁾、冷涼な気候の場所が避暑地として成立し

得るという認識の転換をみてとることができる。たんに「模倣」という語でひとくくりに、避暑の受容をとらえるのではなく、回顧談などの語りから避暑地がどのように認識されていたのかを明らかにすることが重要である。

なお、軽井沢は日本人と欧米人を問わず、乗馬・テニス・ゴルフなどの多様なスポーツが盛んに展開される場所となっていく。近代政治史の佐藤(2020)が明らかにしているように、軽井沢には戦前期の日本を代表する政治家の集まる「政治サロン」化を強めていくという多様な側面がある。

V. むすび

本稿では、明治期の軽井沢を避暑地として見いだした欧米人と日本人富裕層がそれぞれ同地をどのように認識し意味づけていたのかを明らかにしてきた。以上をふまえて、軽井沢の発展の礎となる明治期軽井沢の避暑地の成立過程を通観してみたい。

サトウとホーズ、そしてチェンバレンとメイソンの編集した『*A Handbook for Travellers in Japan*』（『ハンドブック』シリーズ）の記載内容の変化を経年的に追うと、とく欧米人（宣教師）を中心とする避暑地となっていく様子をみてとることができた。ただし、第5版（1899年）では、避暑地に適していると認められてはいるものの、とくに魅力的な旅行先ではないと記されていた。このことは、軽井沢が避暑地としてまだ確立していない時期の認識を示していると考えられる。

一方で、1886（明治19）年、軽井沢はショウとディクソンによって「発見」され、1889年のノットの気象観測によって、東京との気象データの比較を通じて夏季の健康的な避暑地として意味づけられていた。ショウの息子ロナウドの回顧によれば、軽井沢の冷涼な「空気」は、平野部と明らかに異なり、健康的なものとしてとらえられており、ノットやエンバーソンの語りからも日本に滞在する欧米人は、夏季の暑熱を忌避する傾向にあった。その

点において軽井沢は避暑に最適な場所であったというよう。さらに、たんに蒸し暑さだけでなく、コレラのような伝染性の疾病から逃れることを可能とする場所としても認識されていたと考えられる。多くの欧米人が軽井沢という冷涼な高地を健康的な避暑地とみなし、身体的・精神的を保養する適地と評価した点は、欧米列強諸国の植民地であった東南アジア各地のヒルステーションと通じる部分がある。

次第に多くの欧米人が軽井沢を訪れ、滞在するようになるにつれて、社交を重視したコミュニティが醸成され、テニス・野球・音楽会・散策などを行なう組織的な活動がはじまった。なかでも彼らがよく訪れたのは、眺望のよい山であり、英語の愛称がつけられていることもあった。結局、多くの欧米人たちが避暑を訪れ、軽井沢の気候や自然環境に身を置くという経験が蓄積されることによって、軽井沢は「人気」の避暑地として社会的に構築されていったと考えられる。簡素で狭小な木造家屋であるものの、滞在場所としての別荘は、軽井沢がたんなる避暑地としてだけではなく、別荘地へと発展するうえで際立った景観的要素である。

他方で、明治期の軽井沢に関する日本人の回顧談を検討すると、軽井沢での滞在は、まず身体の療養を目的としていたことも明らかとなった。もともと日本で避暑とは温泉地へ赴くことを意味していたため、当初は温泉のない軽井沢はあまり注目されなかった。しかし、新渡戸稲造のように実際に軽井沢を訪れてみると、その冷涼な気候と過ごしやすさを実感したのである。このような身体感覚は、新たな避暑のあり方の受容として位置づけられよう。療養地という側面については、前田（2021）で触れたように軽井沢が陸軍の脚気転地療養地であったという経緯も同時代のなかで無関係ではないだろう。実際、1900（明治33）年頃には脚気、神経衰弱、胃腸病などの療養地としても軽井沢は語られている（一記者 1903: 48）¹⁵⁾。

これまで欧米人の模倣という言葉で日本人による避暑の受容が説明されてきたが、日本人富裕層による軽井沢の経験を検討することで、避暑地とし

ての軽井沢の成り立ちをよりよく理解することができる。明治期の軽井沢は、「健康」と結びつけられたことで欧米人のみならず、日本人をも惹きつけることとなったのである。欧米人と日本人にとって軽井沢は、健康の回復・維持・増進に好影響を与える場所であり、場所の経験によって社会的文化的につくられたといえよう。

【付記】本稿は2021年11月に立命館大学へ提出した博士論文の一部を加筆・修正したものである。

注

- 1) 戦前の生活史を論じた岩瀬（2017）を参考にし、「富裕層」とは、皇族・貴族・政治家・財閥当主、高級官吏のほか、明治期には少数であった大学教員・学者（新渡戸稲造等）など経済的・社会的身分の高い者を指す。
- 2) チャンバレンは1873年に来日し、東京帝国大学で教授を務めた。日本アジア協会では日本文化や日本語の研究に従事した。一方のメイソンは、1875年に工部省のお雇い技師として来日し、おもに電信技術の向上に貢献した。
- 3) 木下（2022: 14）も同様の指摘をしている。
- 4) この記述は、ショウとディクソンの来訪と避暑地軽井沢の発見が1886年という説に有力な根拠をあたえるものである。
- 5) 1956年7月26日付でロナウドから当時の軽井沢町町長であった佐藤不二男へ送られた手紙である。
- 6) 福沢諭吉と宣教師との関係を論じた白井（1999: 68）は、1873（明治6年）に日本へ派遣された宣教師ショウが1902（明治35）年に亡くなるまでの間に英国国教会 SPG へ送った書簡を渉猟しても軽井沢に関する記述はまったく見いだせないと述べている。
- 7) 日本語訳については、軽井沢新聞社（2010）『Grand Vignette』、軽井沢新聞社、10頁を参考にした。
- 8) 『信濃毎日新聞』1936年8月6日「軽井沢発展座談会2」。
- 9) 『信濃毎日新聞』1936年8月11日「軽井沢発展座談会7」。
- 10) 「外國人ニシテ日本人ノ名義ヲ以テ土地家屋ヲ所有シ並ニ会社ヲ設ケ商業ヲ営ムモノ調査一件」、『戦前外務省記録3門9類4項47』（外務省外交史料館所蔵）。
- 11) 雑誌『住宅』を発刊していたのは、住宅改良会という組織で、主たる編者を務めたのは橋口信助であった。彼はアメリカ留学を経験し、洋風住宅を日本にも普及させるべ

き、住宅会社「あめりか屋」を設立した。『住宅』は、日本における洋風住宅の導入を推進するとともに、あめりか屋が設計、建設した住宅や別荘を紹介する役割を果たしていた。あめりか屋は1915年頃から野沢源次郎と協働し、軽井沢の別荘地開発に進出した。そのため、1917年8月の『住宅』『軽井沢号』は、軽井沢という場所とあめりか屋住宅の宣伝的な意味をもつため、記述の扱いには注意が必要である。寄稿者は軽井沢での避暑を経験した著名人、別荘を所有した政治家、軍人、学者などであった。ただし記事内容は、軽井沢をたんに評価するだけでなく、改善すべき点や諸種の提案、あるいは軽井沢を好ましく思っていない意見も掲載しており、たんなる宣伝に始終しているわけではないため、資料として取り上げる価値がある。

- 12) 『信濃佐久新聞』1911年9月1日「軽井沢の名星」。
- 13) ホワイトは、1871年に来日したアメリカン・バプテスト自由伝道協会の宣教師である。新渡戸が1875年に入学した東京外国語学校(旧外語)の教師をつとめていた(キリスト教歴史大事典編集委員会1988:1296)。
- 14) たとえば、十代田(1995)は、1893年7月の『讀賣新聞』に掲載された「避暑地案内」の内訳が山岳8ヶ所、温泉12ヶ所、海浜6ヶ所であることから、日本人にとって、古来より親しまれた温泉地に行くことが「避暑」であったと指摘している。
- 15) 療養地としての軽井沢の詳細については別稿で論じる。

文献

- 秋里籬里(1995[1802])『木曾路名所図会(版本地誌大系6)』、臨川書店。
- 足立鐵之助(1930)「軽井沢の昔話」、『ローンテニス』6、12-13。
- 岩瀬 彰(2017)『「月給100円のサラリーマン」の時代—戦前日本の〈普通〉の生活—』、筑摩書房。
- 荒山正彦(1989)「明治期における風景の受容—『日本風景論』と山岳会—」、『人文地理』41(6)、63-76。
- 荒山正彦(1991)「明治期における英文日本旅行案内書の刊行」、『大阪大学日本学報』10、123-139。
- 荒山正彦・大城直樹編(1998)『空間から場所へ』、古今書院。
- 一記者(1903)「軽井沢通信」、『旅』8、報知社、48。
- 一記者(1909)「軽井沢に於ける新渡戸博士」、『実業之日本』12(18)、1369-1370。
- 鶴崎熊吉編(1930)『青山胤通』、青山内科同窓会。
- 内田順文(1989)「軽井沢における「高級避暑地・別荘地」のイメージの定着について」、『地理学評論』62A(7)、495-512。
- 内田青蔵・藤谷陽悦・山形政昭(2000)「戦前期における軽井沢別荘地と洋風別荘の変容に関する研究」、『住宅総合研究財団研究年報』27、57-64。
- エイキン, R. (白坂 蕃訳)(2014)『インペリアル・ベルヴェデーレーマラヤのヒル＝ス

- テーション』、立教大学観光学部ヒルステーション研究プロジェクト。
- 岡村八寿子（中島松樹・大久保保監修）（2018）『祖父野澤源次郎の軽井沢別荘地開発史—源次郎と3人の男たち—』、牧歌舎。
- 小口千明（1985）「日本における海水浴場の受容と明治期の海水浴」、『人文地理』37（3）、215-229。
- 尾崎行雄（1925）「軽井沢が好きなわけ」、『軽井沢町報』1。
- 尾崎行雄（1936）「聴溪閑話」、泉寅夫『軽井沢町誌』、泉寅夫、270-273。
- 軽井沢町誌刊行委員会（1988）『軽井沢町誌 歴史編（近・現代編）』、軽井沢町誌刊行委員会。
- 木下裕章（2022）「『HANDBOOK OF TRAVELLERS IN JAPAN』での軽井沢の紹介—明治17年版、及び明治40年版より—」、軽井沢文化遺産保存会編集委員会編『軽井沢の文化遺産と資料集2』、軽井沢文化遺産保存会、12-21。
- 小林 収（1974）『軽井沢開発物語』、信濃路。
- キリスト教歴史大事典編集委員会（1988）『日本キリスト教歴史大事典』、教文館。
- 斎藤 功（1991）「外国人によるブナ帯風土の発見—軽井沢以前の避暑地の一コマ—」、市川健夫編『日本の風土と文化』、古今書院、164-179。
- 斎藤 功（1994）「わが国初の高原避暑地宮ノ下と箱根—明治期を中心に—」、『人文地理学研究』18、133-161。
- 佐藤 信（2020）『近代日本の統治と空間—私邸・別荘・庁舎—』、東京大学出版会。
- 佐藤大祐（2003）「明治・大正期におけるヨットの伝播と受容基盤」、『地理学評論』76（8）、599-615。
- 佐藤大祐・斎藤 功（2004）「明治・大正期の軽井沢における高原避暑地の形成と別荘所有者の変遷」、『歴史地理学』46（3）、1-20。
- シーモア, S. (2005) 「風景の歴史地理」、グレアム, B.・ナッシュ, C. 著（米家泰作・山村亜希・上杉和史訳）『モダニティの歴史地理 下巻』、古今書院、227-256。
- 宍戸 實（1987）『軽井沢別荘物語』、住まいの図書館出版局。
- 白井堯子（1999）『福沢諭吉と宣教師たち—知られざる明治期の日英関係—』、未来社。
- 十代田 朗（1995）「近代日本における「避暑」思想の受容と普及に関する研究」、『ランドスケープ研究』59（5）、105-108。
- 中上 郁（2010）「明治初期の神戸外国人居留地における下水道の意義」、『人文地理』62、462-477。
- 西田正憲（1999）『瀬戸内海の発見—意味の風景から視覚の風景へ—』、中央公論新社。
- 新渡戸稲造（1917）「軽井沢の思ひ出」、内田青蔵編（2001）『雑誌『住宅』〔復刻版〕第1巻』、柏書房、349。
- 八田裕次郎（1917a）「草分けの別荘持として」、内田青蔵編（2001）『雑誌『住宅』〔復刻版〕第1巻』、柏書房、350-352。

- 八田裕次郎 (1917b) 「ボーデングハウスを設けよ」、内田青蔵編 (2001) 『雑誌『住宅』〔復刻版〕第1巻』、柏書房、356。
- 花里俊廣 (2012) 「1930年頃の避暑地軽井沢における外国人の社会活動」、『日本建築学会計画系論文集』、77 (676)、1283-1292。
- 原 嘉道 (1930) 「青山先生の思ひ出」、鵜崎熊吉編『青山胤通』、青山内科同窓会、316-325。
- 原 遼平 (2022) 「明治後期の資産家層が見た瀬戸内海の風景—明治34年西日本旅行を事例に—」、『人文地理』74 (1)、27-45。
- 福田真人 (1991) 「肺病・サナトリウム・転地療養—結核の比較文化史—」、『言語文化論集』13 (1)、1-53。
- フレーザー、M. (コータツツイ、H. 編) (横山俊夫訳) (1988) 『英国公使夫人の見た明治日本』、淡交社。
- 梅千野成央・土本俊和・武智三奈 (2010) 「軽井沢における保養地景観の形成過程」、『日本建築学会計画系論文集』75 (647)、103-109。
- 前田一馬 (2020) 「大正・昭和戦前期の軽井沢における「千ヶ漣遊園地」の開発と別荘所有者の特徴」、『歴史地理』63 (3)、23-44。
- 前田一馬 (2021) 「明治前期の陸軍による脚気転地療養地の選定過程」、『地理学評論』94 (5)、381-399。
- 宮原安春 (1991) 『軽井沢物語』、講談社。
- 安島博幸・十代田 朗 (1991) 『日本別荘史ノート』、住まいの図書館出版局。
- Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1891) *A Handbook for Travellers in Japan*. Jonh Murry.
- Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1894) *A Handbook for Travellers in Japan*. Jonh Murry.
- Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1899) *A Handbook for Travellers in Japan*. Jonh Murry.
- Chamberlain, B. H. and Mason, W. B. (1907) *A Handbook for Travellers in Japan*. Jonh Murry.
- Emberson, R. (1904) Japan, *The Missionary Outlook*, December 1904.
- Knott, C. G. (1891) Notes on the summer climate of Karuizawa, *Transaction of the Asiatic Society of Japan*, 19, 565-577.
- Lloyd, A. (1909) *Every-Day Japan: written after twenty-five years' residence and work in the country*. Cassell and Company, p. 205.
- Sato, E. M. and Hawes, A. G. S. (1881) *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*. Kerry.
- Sato, E. M. and Hawes, A. G. S. (1884) *A Handbook for Travellers in Central and Northern*

Japan. JonhMurry.

Shaw, R. M. D. (1959) Karuizawa and Archdeacon Shaw, *Japan Missions: An Anglican Missionary Quarterly*, 9 (3), pp. 10-12.

Shaw, R. M. D. (1976) To the Mayor of Karuizawa, 佐藤不二男 『軽井沢物語』、軽井沢書房、70-71。

Shaw, N.R. (Grandy, A. ed.) (1991) *The Diaries of Norman Rymer Shaw Volume 1: Early Years to 1913*. A. Grandy.

